リレーコラム No. 8（令和元年度）

能力を提供し合う体験

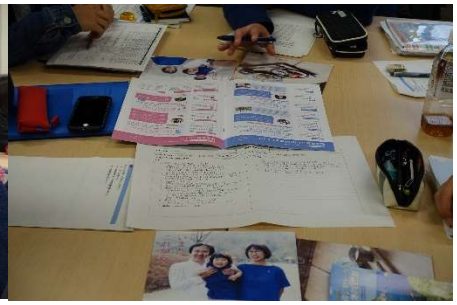
鳥取大学地域学部　講師　東根ちよ

鳥取大学に赴任して早くも 4 年目となりました。はじめて生まれ育った地域を離れると、毎日たくさんの発見や出会いに恵まれます。私にとって、そのひとつにプロボノとの出会いがありました。プロボノ・・・？見聞きしたことのあるかたは多くないかもしれません。

プロボノとは、個人がもつ知識やスキル、経験をいかして取り組むボランティア活動で、ラテン語の「公共善のために（Pro Bono Publico）」を語源としています。長らく、弁護士をはじめ法律にかかわる職能団体が、業界全体の職業倫理を高める活動として行っていました。ですが、最近では NPO やボランティア団体の困りごとに対し、企業で働くビジネスパーソンがチームを組み支援するプロボノが広がりを見せています。

鳥取県には、とっとり県民活動活性化センターがマッチングを行う「とっとりプロボノ」があります。赴任して間もないころ、ひょんなことから活動に参加させていただくことができました。その際のお題は、NPO 法人智頭町森のようちえんまるたんぼうのマーケティング調査。4 名の社会人がチームを組み、約半年かけて提案内容を完成させました。社会人がアフターファイブで行うプロボノは、一人ひとりの知識や経験があつまり、社会の問題について学び合い、達成感、そして時には楽しさを感じるものでした。

この経験を学生とも共有したいと思い、ワークショップ入門という授業にプロボノ体験を取り入れました。お題は、とっとり県民活動活性化センターの若者に対する広報戦略。若者という点では、学生はまさに当事者。さまざまな経験や知識、アイデアを出し合いながら、広報誌やホームページ、SNS の改善案をチームごとに提案しました。



プロボノを行う空間では、支援する側―される側という関係性が生じにくいうえ、一人ひとりが経験や知識など、何か「もっている」人として尊重されます。また、チームメンバーの発言から学び合い、最終的な提案発表では達成感や喜びを感じ、それらを共有することが自然と行われていきます。このような場面に立ち会うたび、それは「福祉社会」がめざす空間のように思えます。このように、時には福祉という言葉は使わずとも、体験を通じて福祉文化を根づかせていくことが、私が鳥取にきて関心をもつことのひとつです。